

出来事の演算子——連結するパレットの「御本尊」

飯盛 希

杉本克哉は、これまで、おもちゃやフィギュアといった、自身のコレクションをモチーフに「だまし絵」のような——いわゆる「写実的」な——絵を描いてきた。そのとき、対象を「静物」として——いわば冷醒に——描くのではなく、作品ごとに寓意的な主題を設定し——^{テーマ}普通、そうするように——おもちゃやフィギュアに役割を与え、演出することが多い。いわゆる「七つの大罪」に対応する「Mirror」シリーズは、その典型である。

しかし、今回、新たに発表されたのは、^{Idolization}「偶像化」と題された一連の「パレット」である。自身のパレットを対象に絵を描き、そのときにできたパレットを次の対象として描き、またそのときにできたパレットを次の対象として描く……というふうに、自己産出的に進展するシリーズである。同じように「偶像崇拜」という宗教的な観念に関連づけられているが——言うまでもなく——パレットは、絵を描くときにできる「副産物」であり、意図的に構成されたモチーフではない。

ただし、だからといって、パレットの絵が寓意的でないというわけではない。「偶像」の「偶」という字は——「土偶」や「木偶」といった言葉が機能のない人形を表すように——似て非なる形骸であることを意味する。「像」というのは彫像でも図像でも構わない。したがって、これまで杉本が描いてきた——おもちゃやフィギュアは、それ自体「偶像」だが——絵もまた、その対象と似て非なる「偶像」であると言える。つまり、「Idolization」というのは、その制作自体のことを指しており、「絵画」の別の言いかたなのである。

ひるがえって言うと、^{Idolization}「偶像化」というテーマは、杉本の制作に通底する観念であるように思われる。たとえば「Mirror」シリーズにおいて、構成されたモチーフ——すなわち対象——と、それを描いた絵——表象——とを並置するのは、画家の主眼が、単なる「写実」ではなく、対象と表象のズレにこそ置かれているからだろう。一般的に、「写実的」な絵が、その対象と見比べられるとき、あらに注目が集まるものだが、杉本は、それを利用して、絵画が似て非なるものであることを強調しているようである。したがって、「Idolization」シリーズは、やはり対象と表象とを並置する点で、「Mirror」シリーズの延長戦上にあると理解される。

しかし、「Mirror」シリーズの作品と真逆に、今回、「Idolization」の展示では、「実物」[註1]のパレットが右に、絵のパレットが左に並べられている。これは、いわば画家が自らを対象化したために——それこそ鏡のように——反転してしまった、などという理由からではない。「Idolization」の作品を観察すると、どれも絵具が左側に偏っていることが認められる。パレットの——壁にかけられた状態で、私たちから見ると——左側が、画家にとって前方であり、右側は、画家にとって後方なので、腕が届きづらいからだろう。杉本は、まぎれもなく右脇にパレットを置いて描いている。つまり、杉本は右ききなのである。ふり返れば、「Mirror」シリーズの作品において、モチーフは左で、絵が右だったのも、そのためであると分かる。もし、杉本が左ききだったら、これらは反対になるはずである。したがって、右や左といった位置に特別な意味はない。杉本は「Idolization」の制作においても、対象のパレットを左に見ながら、その右に並置した画面に絵を描いたはずだが、しかし、今回の展示では、「Mirror」シリーズと一貫しなくなってしまうことも厭わず、逆に並べたのである。

どうやら、それは単に、会場の動線にしたがって左回りに並べたからであるらしい。というのも、杉本は「Idolization」をひとつづきの作品として見せたがっているのである。そうした意図は、各々の作品につけられた題名からも看取される。どの作品も、それぞれを識別するためにナンバリングされているのだが、「1, 2, 3, ...」という連続する数ではない。もし、作品が購入されて、シリーズの一部が欠けてしまったとき、順序を記していたのでは、むしろ連続性が破綻してしまう。したがって、そのとき、なお一連の作品でありつづけるために——というより、そう見えるように——あえて前後関係が不明なナンバリングを行ったのである。《Idolization 0434》や《Idolization 0835》など、いずれも4桁の数字だが、これらは——いくつかを見比べれば分かるように——時刻を表している [註2]。

¹ ステートメントを疑うわけではないが、杉本の絵の対象は、たしかに「実物」のパレットである。普段、使っているという紙パレットと同じ8号サイズのキャンバスを支持体に絵を描き、それと同じ大きさにカットした木板をパレットとして用いたのである。

² ひとつだけ会場の高いところに設置され、サイズも大きい——したがって、価格も他の作品より高い——《Idolization 204》という作品に付された「204」は「0204」のまちがいでない。これは「2時4分」ではなく、画面に表記された「出エジプト記 第20章4節」(Exodus 20:4)を指している。どちらもコロン(:)を省略したかたちだが、まったく異なる規則によって名づけられており、「Idolization」シリーズのなかで別個の作品であると言える。

杉本は、その日、制作を終えた時刻を——まさしく日記のように——日付とともにパレットに記し、その写真をインスタグラムにアップロードしていた。こうした記録は、「Idolization」シリーズのために行ったのではなく、以前からの習慣であるらしい——あるいは、それこそがパレットの絵を描くという着想をもたらしたのかもしれない。最終的には、作品の完成した日時が記録されることになるが、無論、制作途中とは異なり、画面に表示はされず、画面の裏に書かれている。たとえば——秘密だが——《Idolization 0434》のキャンバスの裏には「2018. 5. 6 — 5. 31 AM 4:34」と記されている [註3]。なかなか危険な時間帯に及んでいることも看過できないが、より驚くべきは、1枚のパレットの絵を描くために途方もない時間——ほとんど1ヵ月近く——を要していることである。

白状すると、筆者も大学1年生のとき、所属していた美術サークルで、杉本と同じようなことを試したことがある。すなわち、ふたつのキャンバスに等しく絵具を配置し、一方は「実物」のパレットで、もう一方は「パレットの絵」であると主張したのである。このとき私は——あらゆる意味で——技術がなく、うまく絵を描くことができなかったので、姑息にも、そうすれば容易に「写實的」な絵が描けるといふ屁理屈をこねたのである。

杉本の仕事は、こうした狡猾な大学生の所為とは本質的に異なっている。彼の描いたパレットは、真の意味でパレットの絵であり、まったく平坦である。したがって、パレットではない。その描写は——超絶的とも、あるいは単に技巧的とも言わないにせよ——たしかな技術力に基づいている。気の毒なことに、こうした作業は「ずっと面相筆」で行わなければならない、遅々として進まない。描くのが大変でないようにパレットを調整しながら描けば好いのだが、画家は意識的にはパレットを制御しなかった [註4]。次の制作に移行し、それが俄に対象として認

³ 制作を開始した日付も記されているため、それに要した日数が知られる。ちなみに、これにつづく《Idolization 0234》の裏には「2018. 5. 31 — 6. 25 AM 2:34」と、《Idolization 0835》の裏には「2018. 6. 26 — 7. 13 AM 8:35」と記されている。時刻だけが作品のタイトルとして採用されたのは、上述のとおり、順序を不明確にするためであると考えられる。

⁴ パレット上の絵具を一瞥すれば、よく使われたものも、あまり使われなかったものもあることが分かる。杉本は、どんな絵を描くかによらず、とりあえず——几帳面なことに——すべての絵具を、ほとんど等量ずつ並べるようである。最初の（ということになっている）作品では50色以上数えられるが、制作時間を短縮するためか、後半の作品では40色程度に減っており、多少の手加減は行ったことが認められる。

識されるとき、彼は、あまりの煩雑さに絶望したことだろう。それでも辛抱強く描きつづけたのは——「偶像崇拜禁止」ではなく、むしろ——「偶像」をつくることこそを自らに課したからである。その作業が完了した瞬間には、感慨もひとしおだろう。ゆえに、作品が完成した時刻は、その作品のタイトルとして相応しいのである。

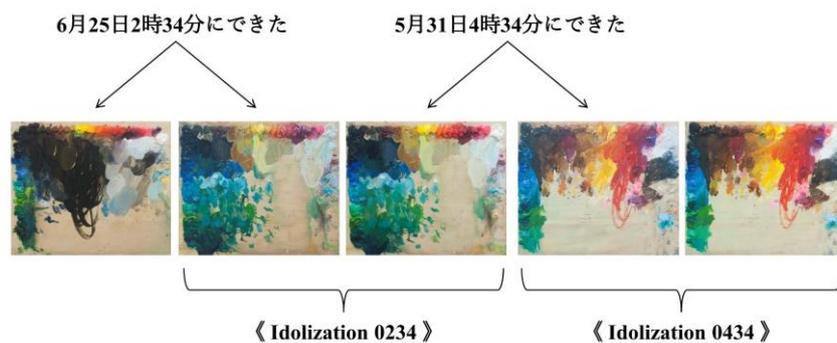
これを踏まえると、昨年、杉本が、出版されたばかりのブリュノ・ラトゥールの訳書を熱心に読んでいた理由も、さかのぼって分かる気がする [註5]。無論、彼は——プロテスタントの家に生まれたこともあってか——そもそも宗教に対して強い関心をもっていたために、この本に興味をもったにちがいないのだが、これまで杉本の作品を見てきた者の多くが困惑したであろう急激な作風の変化は、これがきっかけだったのではないだろうか。というのも、いくつかの——ひびきあう——キーワードが、「Idolization」の制作にあてはまるのである。たとえば、画家は、他ならぬ彼の手で構築したパレットに「超過」(surpass) されていると言えるし、私たちは、一連のパレットを順に見ていくことで、まさに「事実」と「製作」のあいだを通過——「移行」(pass) ——していくのだから、会場の動線に沿って連続的に並置された「Idolization」は、いみじくも「通路」(passage) のようである。

ただし、無論、杉本は、ラトゥールの本の挿図として「Idolization」を描いたのではないし、私たちにとっては、杉本の作品を理解するためにラトゥールの本があるのであって、その逆ではない。杉本が「Idolization」によって、画家に対するラトゥールの図式を [註6] ——それこそ——「超過」している点こそが、私たちの関心事である。

⁵ 荒金直人 [訳] 『近代の〈物神事実〉崇拝について——ならびに「聖像衝突」』(以文社、2017年) のこと。杉本は、宗教学者の近藤光博が主催したこの本の読書会に参加していた。

⁶ ラトゥールは、この本のなかで、「近代的」な批判的思想における二分法——すなわち「物神」と「事実」あるいは「実在」と「構築」の二項対立——を、彼一流のしかたで脱構築してみせた。ただし、たとえば、カンドンプレの入信者たちや、パストゥール研究所の研究者などを比較することにおいては——人類学的というより——むしろ観念史的に、非近代的な〈物神事実〉の概念を浮かび上がらせたが、「芸術家たちは」とか、「画家は」——誰でもなく——「誰もが」などと言って (58-59 頁。傍点は引用者による) ——史的にではなく——やはり人類学的に、美術制作を例にとるとき、彼は、ある種のトートロジーに陥る。曰く「誰も内在と超越を区別することができなかった」(71 頁) というのだが、彼の措定した「近代人」が具体的には誰でもない以上、誰も「近代的」でないのは、あたりまえであるとも言える。

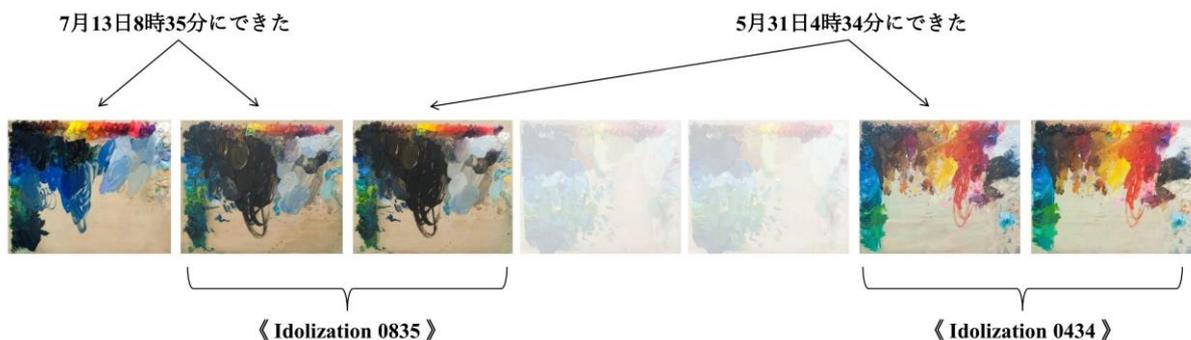
注目すべきは、やはり、杉本が作品に与えたタイトルである。というのも、「Idolization」シリーズの題名は、あきらかな欺瞞に貫かれているからである。たとえば、《Idolization 0434》の「0434」は、パレットの絵が——そして、同時に、それを描くのに使っていたパレットが、もはや変更されなくなり、したがって——完成した瞬間の時刻（5月31日）「4時34分」である。対象のパレットは、制作を開始した5月6日の時点で、すでにあつたのだから、「4時34分」とは関係がない。つまり、どの作品もパレットとその絵のセットとして提示されているにもかかわらず、作品が完成した時刻は、絵とそのパレットのものなのである。さらに言うと、（5月31日）「4時34分」にできたパレットは、次の絵の対象として、その絵とともに——あたかも（6月25日）「2時34分」にできたかのように——《Idolization 0234》という題名がつけられるのである（下図）。



もちろん、杉本がまちがえたのではない。対象のパレットは、制作の際、左に置かれ、すでに固着していたはずで、一方、その絵を描くためのパレットは、おそらく右脇に置かれ、それと画面とのあいだを行き来する筆触の痕跡も生々しい。いくら神経をすり減らす作業の末に疲弊しきっていたとしても、こうした差異を忘れてしまうとは考えにくい。そもそも、杉本は、日々変化するパレットの様子をInstagramに記録しつづけていたのだから、パレットとその絵は——見た目こそ類似しているものの——対象と表象（あるいは無意識と意識）という異質なものであり、絵とそのパレットこそが——見た目は違えど——同時に生まれるという意味で、まさに「双子」であると自覚していたはずである。したがって、杉本が正しくないタイトルをつけたのは、単に、「Idolization」を展示するとき、絵とそのパレットのセットが並んでいるように見えず、パレットとその絵のセットが並んでいるように見えるという「プレグナンツの法則」に惑わされてしまったからではない。

これは、あきらかに意図された嘘である〔註7〕。ただし、嘘をついてまで連続性を保障しようとしたのではない。連続性を保障するためには嘘をつかなければならないのである。仮に、正しくナンバリングしたならば——たとえば「5月31日4時34分」にできたセットと「6月25日2時34分」にできたセットは、杉本が《Idolization 0234》と名づけた——となりあう絵とパレットが似ていることによって、連続であるように見える。しかし、この結びつきは——最初に述べたとおり——作品が売れたときに断絶してしまう。したがって、上図のように、情報がセットのあいだにまたがって作品同士を関連づけるのでなければならないため、「Idolization」シリーズは、どの作品も、絵とそのパレットのセットではなく、パレットとその絵のセットなのである。

しかし、作品が売れた場合にも「連続である」ためには、さらに別の嘘を重ねなければならない。《Idolization 0234》が売れてしまったとき、《Idolization 0434》のとなりには——たとえば——《Idolization 0835》が位置することになる。このとき、《Idolization 0835》のパレットは——実際には（6月25日）「2時34分」にできたものだが——《Idolization 0434》の絵が完成した（5月31日）「4時34分」にできたかのように——というよりも、そうであるということにならってしまう（下図）。



⁷ ただし——これも秘密だが、先ほど、キャンバスの裏と書いたように——杉本は、絵のパレットの裏にだけ作品の完成した日時を記し、「実物」のパレットの裏には書いていない。したがって、自分には嘘をついていないが、これはまさしく、対象のパレットにその絵が完成した時刻をナンバリングするのは嘘であると知っていたからである。

すると、^レ実の絵とそのパレットの結びつきは、まったく反故にされてしまう。というのも、そう見えれば、実際に連続している必要はないという以上に、仮令、作品が売却されないままで、事実、連続性を維持したままであるとしても、そうとは断言できないのである。どのパレットが、どの絵を描いたときにできたものなのかは——画面の裏の「日記」を確認しないかぎり——分からない [註8]。

しかし、これこそが杉本の狙いだったのではないだろうか。つまり、もはや順番どおりであるか否かは問題でないのだから、「Idolization」は並び替え^{アレンジ}が可能である。たとえば、時系列を無視して、タイトルにつけた時刻の順に並べたとしても、あるいは、まったくデタラメに並べたとしても、連続して見えることに変わりはない。したがって、どのパレットも、どの絵を描いたときにできたものでもありうることになる [註9]。

もともと、ふたつずつのセットに分割せず、全体をひとつの作品として提示——ないし販売——すれば、こうした嘘をつくこともないのだが、そうするわけにもいかない。「Idolization」の制作においては（上図からも分かるとおり）どうしてもパレットが残ってしまうため、終わりがないのである [註10]。では、始まりはどうだろうか。最初のパレットは、なにか別の絵を描いたときにできたものであるはずだが、その作品は見あたらない [註11]。

⁸ そもそも、絵とパレットが「1対1」に対応するとも限らない。すくなくとも「Idolization」シリーズの制作においてはそうであるらしいが、ひとつのパレットで複数の絵を描いてしまったり、ひとつの作品をつくるときに、ふたつ以上のパレットを要したりすることも考えられる。

⁹ 杉本は、今後、他の画家のパレットを対象に描くことにも意欲を見せていたが、その場合、彼が成功を収めるのは最初の1度だけである。つまり、2度目以降、彼は、今回と同じことをくり返すことになる。したがって、彼は、すでにこれを済ませていると言って好い。

¹⁰ 展示されている最後のパレットは、《Idolization 0410》の絵を描くときにできたパレットだが、これはパレットにすぎない。というのも——すくなくとも、今のところは——その絵が描かれていないため、まだ作品ではなく、したがって、題名も価格も設定されていない。

¹¹ それに相応しい——というよりも、あやしい——作品は《Idolization 204》である。「偶像崇拜禁止」の根拠として知られる「出エジプト記 第20章4節」を、まさに色とりどりの絵具で書いた作品であり、「偶像」をテーマとする制作の出発点であるようにも見える。しかし、杉本にしたがって、絵を「偶像」と捉えるならば、《Idolization 204》は「偶像崇拜禁止」の「偶像」であり、いわゆる「貼紙禁止」の貼紙のように、自己矛盾している。

これについて、杉本は、「御本尊がない」と説明していたが、この言葉は二重の意味を含んでいる。すなわち、他ならぬ——絵に描くことができない——キリスト教の神と、展示していない——自身の描いた——具体的な絵とを、同時に「御本尊」として想定しているのである。超越的なものと内在的なものとを区別しない画家の思考は、とある文字曼荼羅の複写を「御本尊」と呼び、それに足やカメラを向けることを忌んで戒める人びとの——いかにも物神崇拜的で——きわめて特殊な「実践」[註12]と似通っている。

しかし、「Idolization」においては、どれが最初のパレットであるということはないのだから、ひとつの原初的な絵が存在することを前提するべきではない。むしろ、どのセットについても「御本尊」となる絵が潜在するのである。すると、「Idolization」シリーズの作品は、どれもが、いわば演算子のような機能^{function}をもつ。つまり、どれも互いに連続するだけでなく、任意の絵画と連結して、あたかも、それを描いたときにできたパレットと、またそれを描いた絵であるかのように、その都度、意味を変えるのである。したがって、「Idolization」は、終わらないし、始まってもいない。コレクターや、キュレーターが、杉本の作品を——それこそ、杉本の他の作品だけでなく、他の画家が描いたものなど——他の絵のとなりに並置するとき、それは起動するのである。これこそを、私たちは「出来事」と呼ぶべきではないだろうか。

2018年10月

¹² 彼らの祈りの言葉である「南無妙法蓮華経」は——「南無阿弥陀仏」とか「南無釈迦牟尼仏」など、仏の名を唱える「念仏」とは異なり——「唱題」と言われ、文字どおり『法華経』という経典の題目を唱えることである。すなわち、仏——ないし、その偶像——ではなく、本を拝んでいるのである。